後楽園キャンパスに待望のATM設置
「とても便利になった」と在学生

後楽園キャンパスに待望のATM（現金自動預払機）が設置され、3月24日、田口東・理工学部長らが出席して、開所式が行われた。新設されたのは三井住友銀行のATMで、後楽園キャンパス3号館1階コミュニティーホール内に設置された。

ATMオープンのテープカット

開所式には、田口理工学部長をはじめ三井住友銀行法人マーケティング部部長、八王子法人営業部長など関係者ら10数人が出席、オープンを祝ってテープカットが行われた。田口理工学部長が初の利用者として預金の引き出しを行い、ATMが始動した。

後楽園キャンパスには、従来、郵便局のATMがあったが、利用件数の不足などから2007年3月31日に廃止されていた。

当時、年間利用件数は約34、000件で、単純計算でひと月あたり3、000件近い利用があったことになるが、夏休みなどで大学が長期の休みとなる期間はほとんど利用されていなかった。また後楽園キャンパス周辺には、郵便局や銀行のATMが数ヶ所設置されており、キャンパス内のATMの必要性がさほど高くないという理由もあった。

とはいえ、やはりキャンパス内にATMが1台もないのは学生にとっても教職員にとっても不便であるため、大学は郵便局のATM廃止が決まった2006年から数行の銀行と交渉を重ねてきていた。後楽園キャンパスの学生生活課によると、オピニオンボックスにもATMの設置を望む数件の投書があったという。

ATMが設置された3号館のコミュニティーホールは、食堂に隣接しているため昼休みの食事の際や、放課後くつろぐ時などに利用しやすい。また3号館で開催される学会や、コンサート時には学外の方々の利用も見込まれる。

新学期早々、このATM設置の情報がキャンパス内に浸透し、学生からはとても便利になったという声が聞かれた。中には新しく三井住友銀行の口座を開設したという学生もいた。

ATMの利用時間は、平日・土曜が午前8時から午後5時。日曜・祝日は休業。

（学生記者　小室靖明＝理工学部3年）

「これからの生命科学の行方」をテーマに
生命科学科設立記念の講演会開く

今春、理工学部に新たに生命科学科が設立されたのを記念する講演会が4月4日、後楽園キャンパス3号館3階小ホールで行われ、日経BP社医療局バイオセンター長の宮田満氏が、「これからの生命科学の行方」と題して約1時間講演した。

宮田氏は昭和54年東京大学大学院修士課程修了後、日本経済新聞社に入社。日経バイオテク編集長、医療局ニュースセンター長、バイオセンター長、先端技術情報センター長、Biotechnology編集長などを歴任し、平成16年9月

から現職。生命科学という分野を易しく分かりやすく伝えてきている。

この日も、「バイオほど基礎研究と発展、つまり市場とがつながっている分野はない」などと身近なテーマで分かりやすく語り、約100人の出席者から大きな拍手を受けた。

宮田氏の講演は冒頭、「日本とアメリカを比較すると、日本はアメリカに20年遅れています」と衝撃的な発言ではじまった。その理由について宮田氏は、「アメリカでは使える新薬が日本では使えません。つまり、アメリカにいれば治療できたのに日本にいたために死んでしまう、という状況なのです」と新薬認定の遅れを指摘した。

どれだけ日本が遅れているか。今後どれだけ日本で患者を犠牲にしなければならないのか。患者からしてみれば深刻な問題である。

宮田氏は、このように遅れが生じてしまったのは日本には「ドラックラグ」と呼ばれる、薬に対する規制が強いためだという。そのうえで今後の展望について宮田氏は、「政府もバイオの分野にお金をかけるようになり、規制を見直す兆しも出てきました。今後数年で、これらも変わっていくことでしょう」との見解を示した。

講演する宮田満氏

さらに宮田氏は、日本は制度的にはアメリカに遅れをとってしまったが、京都大学の山中伸弥教授が「iPS細胞（人工多能性幹細胞）」について世界に先駆けて研究を進めていることが話題になっているように、「技術面が劣っているわけでは決してない」と強調。

「日本の医療現場もがんばっています。今はまだ不治の病となっている癌に対しても近い将来、癌を治すための新薬が登場することでしょう。次はアルツハイマー、その次は精神疾患と、ターゲットは次々にかわってくるはずです」と将来を見通した。

続いて宮田氏は、病気の人しかみていなかった医療の現場が、メタボリック症候群などの改善のための、「健康学」というものに発展していくと指摘。つまり、医療現場には「薬＋栄養＋運動」という3つをあわせた考え方が求められるようになる、と解説した。

最後に宮田氏は、医療現場の課題について「出席されている先生方ではなく、若い学生の方がこれから実現していく課題であり、また、この生命科学科を発展させるエンジンなのです」と締めくくり、講演の幕を閉じた。

（学生記者　橋本奈緒美＝大学院理工学研究科博士1年）

体連知って、中大スポーツの応援に来て！
各部会を紹介した『TaiRen』創刊号発行

「体連の活動を伝え、もっと一般生に知ってもらいたい」―。そんな思いから学友会体育連盟常任委員会制作の『TaiRen』創刊号が4月に発行された。本誌は、体連常任委員会の前委員長、東貴亮さん（平成19年度法学部卒）を中心に、3ヶ月以上をかけて取材し、制作。新学期がはじまる4月にようやく間に合って刊行、5000部を発行した。体連では、以前『Athlete』という冊子を発行していたが、「内容は薄く、写真も白黒で面白くなかった」ということで、今回は全ページオールカラーで装いを新たにした体連広報誌『TaiRen』を制作した。

「イカツイ、ゴツイを打ち消す」というコンセプト

『TaiRan』を紹介する福山体連常任委員長

現常任委員長の福山倫広さん（法学部4年）は、「体連はスポーツ推薦で入学した学生ばかりが入るところだと思われています。でもそんなことはありません。部員不足の部もあるので、一般生にも入ってもらいたい」という。

その他にも、有料の試合が学生証を提示することで無料になる「観戦ツアー」制度の利用方法や卒業生の進路、マネージャーの仕事など一般生には馴染みの薄い体連に関する情報が満載だ。

福山さんは「早稲田や慶應では、大学をあげてスポーツを応援しようという意識があります。でも残念ながら中央にはまだそれがありません」と、中大生から表紙には、女性誌を意識して、各部会からピックアップした3人の女性ネージャーを起用した。

内容は、体連生へのインタビューや体連に所属している各部会の紹介が中心。一般生から体連に入った学生へのインタビューも掲載されており、新入生へのアピールを重視した内容になっている。

の大学スポーツに対する関心の低さを指摘。そうした現状を踏まえ、「『TaiRen』創刊をきっかけにぜひ体連を知ってもらいたい。そして、試合の応援に来てもらいたい」と願っている。

また今号以降の発行について福山さんは、「次号の予定はまだ立っていませんが、年に1、2回は出したいと思っています」と継続して発行する考えだ。

体連では、この紹介誌の他にもホームページで試合の日程などを掲載し、中大生に積極的に試合の応援に来てもらえるようにすることも企画している。

『TaiRen』は、各学部事務室、Cスクエア、生協、体育館で入手することができる。

（学生記者　上田雄太＝文学部3年）

後楽園キャンパスに「進学相談コーナー」オープン
専門スタッフが、文系含む全学部の受験生に対応

後楽園キャンパス内に「進学相談コーナー」が新設され、5月17日オープンした。設置されたのは、3号館1階の食堂隣で、理工学部だけでなく文系5学部に関する相談にも応じている。

進学相談コーナーには、全学部のパンフレットやシラバスといった資料に加え、より中央大学のイメージが湧きやすいように、と大学紹介DVDの上映も常時行っている。

相談には、進学アドバイザーの専門スタッフが対応。文系学部・理工学部を問わず中央大学に興味を持ち、訪問してくれた受験生及びその父母などに対し、中央大学の

後楽園キャンパスにオープンした進学相談コーナー

教育内容の特徴やカリキュラムを始め、複雑化する入試制度などについて紹介と説明を行っている。

また大学職員や進学アドバイザーが全国の高校を訪問した際に、進路や受験の指向性などについて集めた情報を参考にして、様々な受験生の質問に対応できるようにしている。

開室時間は受験生が利用しやすいようにと、高校の放課後の時間帯に合わせている。多摩キャンパスには同様のコーナーが1号館入学センター内にすでに設置されているが、今回、地の利の良い後楽園キャンパスに進学相談コーナーを新設したことで、都心の受験生にも中央大学をより身近に感じてもらえることを期待している。

進学アドバイザーの一人、田畑興治さんは、「中央大学に興味を持った受験生や高校生は、ぜひこの進学相談コーナーに来ていただいて、自身の大学受験に役立ててほしい」と話している。

開室時間

平日　15時～18時

土曜　10時～16時

日曜・祝祭日と2月、大学行事、夏期一斉休暇中は閉室

（学生記者　小室靖明＝理工学部3年）

講師招き、「北方領土問題」の講演会開く

中大杉並高2年生が研修旅行の事前学習

「北方領土問題」に関する講演会が6月4日、中央大学杉並高校で開かれた。北方領土に最も近い町、根室市から講師を招き、北海道へ研修旅行する2年生の事前学習の一環として行われた。

講師は、根室青年会議所の岡野忠春理事長と同青年会議所北方領土・未来のまちづくり推進室の前田穣副室長の2人。

講演では、北方領土問題の歴史的背景から、返還要求運動、根室の現状について語られた。北海道の北東洋上に連なる歯舞島、色丹島、国後島、択捉島は、第二次世界大戦直後まで日本人が住んでいた土地として返還要求運動が行われてきており、今もこの北方四島の帰属問題は解決していない。「元島民の平均年齢は70歳」という現状で、より多くの人に問題が認識されることが重要になっているという。

講演の途中では、根室の高校生からのビデオレターがあり、同じ高校生として北方領土問題を考えるよい機会になったようだ。最後には、根室のお土産ベスト3も紹介された。

同校の2年生は10月に根室、サハリン、道央、道南の4つのコースに分かれて北海道を研修旅行する予定。根室には、学年の3分の1が訪ねるという。これまでも事前学習として、映画鑑賞を行ってきたが、この日の講演を聞いた生徒からは、「もっと北方領土問題について知って、感じたことをいろんな人に伝えていきたい」、「どういう流れで問題になったか知ることができて興味を持った」といった感想が聞かれ、10月の研修旅行を前に北方領土問題に関する認識、理解を深めたようだった。

（学生記者　池野絵美＝文学部2年）

講演を熱心に聞き入る中杉高生